

CAROWAA

CAROWAA —ちやろわ

アチヨリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィスの現地スタッフが名づけてくれました。

ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。



コミュニティ開発チーム パイロットプロジェクト開始

3類型とパイロットプロジェクトの内容

A. タウン型開発モデル

◆タウン給水プロジェクト

対象サイト: パボ中心部
(パボサブカウンティ)

◆タウンビジネスプロジェクト

(技術訓練校整備)
対象サイト: アティアック中心部
(アティアックサブカウンティ)

B. タウン近郊型開発モデル

◆農産物販売振興プロジェクト

◆地方給水プロジェクト

対象サイト: プクワニ村
(パボサブカウンティ)

C. 農村型開発モデル

◆農業生産振興プロジェクト

◆地方給水プロジェクト

◆地方教育プロジェクト

◆基礎保健プロジェクト

対象サイト①: チェリ村
(パボサブカウンティ)

対象サイト②: ルリヤンゴ村
(アレロサブカウンティ)

7月末、コミュニティ開発チームによるパイロットプロジェクトがようやく開始されました。チームではこれまで、アムル県、ヌウオヤ県全114村で行った調査をもとにコミュニティプロフィールを作成。その結果を踏まえ、各村を「タウン型」「タウン近郊型」「農村型」の3タイプに分ける、「コミュニティ類型化モデル」を提案し、農業、水、教育、保健医療、安全回復といった分野から必要コンポーネントを抽出して開発計画を策定しています。この方法論の妥当性を検証するために実施するのがパイロットプロジェクトです。

まず始動したのは「農村型開発モデル」メニューのひとつである「農業生産振興プロジェクト」。これは国内避難民がキャンプから出身村に帰還したものの、労働力の不足や経済的な事情から十分に農業生産性を確保できない状況を改善し、帰還先への定住を促進するため、牛耕の導入、種子の配布を行うものです。

8月2日、パイロットサイトのひとつ、チェリ村で種子配布が行われました。事前の調査で確認した11の既存農民グループを対象に何度も協議を重ねて規約をつくり、需要の高い5種類(米、大豆、ゴマ、落花生、ミレット)の種子を合計約3トン配布しました。メンバーは5種類のうち1種類の種子をそれぞれの農地で今



種子配布前のミーティングで挨拶をする
平井プログラムマネージャー



種子を前に全グループ整列



種子を農民に手渡す
コミュニティ開発チーム・シエムス団員

シーズン栽培し、もらい受けた同量の種子を収穫時にグループへ返還します。そして次のシーズンはグループから違う種類の種子を受け取り栽培する、という仕組みです。余剰分は自家消費しても、換金しても構いません。

当初、種子はグル近郊で調達できるはずでしたが、調査したところ、収量が高い代わりに次シーズンの収量が大幅に減少するハイブリッド種が多数を占め、収量が低くても継続的に種子として利用できるマザーシードがないことが判明。急ぎよ首都郊外より取り寄せました。

チェリ村へ種子を運搬するのもひと苦勞。約3トンの種子を積んだおんぼろトラックが悪路にはまり、今にも横倒しになりそうなほど傾いてしまいました。スタッフ総出でようやく脱出し、なんとか目的地にたどり着きましたが、現場ではどこにもドラマがあるものです。

チェリ村では農民グループがJICAチームの到着を待ちわびていました。関係者からの挨拶やコミュニティ開発チームからの規約の説明を終え、ようやく種子の配布です。種子袋を前に農民グループがわくわくした表情で整列しています。こんなにきれいに整列したウガンダの人たちを初めて見た気がしました。皆嬉しそうに種子を受け取り、記念撮影。袋を頭に乗せて帰っていくグループメンバーの列がどこまでも続きました。

今後、グループ内で種子を共有するシステムが定着し、生産性が向上することで農民が帰還村へ定住できるよう、フォロー、モニタリングを行っていきます。



種子を受け取り笑顔の農民グループ



袋を頭にのせて帰宅するメンバーたち

道路チーム ドラフトファイナルレポート説明会開催

8月6日、アチヨリ7県の関係者を集め、道路チームによるドラフトファイナルレポート説明会が実施されました。米山総括よりドラフトファイナルレポートの内容説明の後、佐々木団員が昨年8月のプロジェクト開始以来、1年をかけて調査した既存の道路網をもとに、今後どのような道路整備がアムル県、ヌウオヤ県の国内避難民の帰還・定住、さらには将来の発展に裨益するかを提案するマスタープランを発表しました。

これまで、紛争の影響や経済的事情のため十分な道路地図さえなかったアムル県、ヌウオヤ県でしたが、道路チームがGPSを手に県中を走り回って整備した地図や、アムル県、ヌウオヤ県の県庁所在地を中心とした県道・コミュニティアクセス道路ネットワークプランを前に、関係者からは感謝の言葉が述べ



開会のスピーチをする平井プログラムマネージャー

られました。その一方で、アチヨリ地域他県の関係者からは、「自分の県にも同じような支援をしてもらえるのか」という質問が相次ぎ、道路整備は復興支援事業の要であり、迅速な展開を求められている状況を再確認しました。

アムル県、ヌウオヤ県で策定された道路網計画の中で、緊急性の高い優先整備区間として選定された路線の一部はパイロット事業、あるいは平和構築支援無償により現在



レポートの説明をする道路チーム・高橋団員

実施されており、スピードが求められる復興支援の中でインパクトのある協力が展開中です。

北部復興支援プログラムでは、国内避難民定住促進のための道路網整備を最も緊急性の高い課題のひとつとして位置付けており、次の段階ではアムル県同様、LRA(神の抵抗軍)による紛争の被害が甚大であった他のアチヨリ地域全体に展開していくことを検討中です。

アチヨリの名勝 「Fort Patiko」



フォート・パティコ全景



穀物倉庫とされた場所



処刑場に残る斧の跡(矢印のあたり)

アチヨリ地域の数少ない観光地を紹介する「アチヨリの名勝」シリーズ。第1回は「Fort Patiko」をご案内します。

グルから車で30分ほど北へ、コミュニティ開発チームがパイロットプロジェクトを展開するパボの手前で、突然岩が折り重なったような地形が現れます。ここはフォート・パティコと呼ばれ、19世紀にアラブの奴隷商人がこの地域周辺で捉えた奴隷を収容した場所と言われています。この場所で、アラブ諸国へ送

り出す奴隷を選別し、選ばれた奴隷は陸路でスーダンを抜けてエジプト方面へ移動し、その後海路で移送されました。奴隷貿易は船、というイメージがありますが、ウガンダ周辺から送り出された人々は徒歩で相当な距離を移動させられたようです。現地のガイドによれば、収容中、体力や年齢、健康状態の問題で奴隷として選別されなかった者は処刑されたそうです。処刑方法は2つで斬首か銃殺。案内された処刑場には斧の跡が

くつきり！ここで首をはねられたのだと臨場感たっぷりに説明されました。銃殺地は崖になっており、撃たれた後、遺体そのまま谷底に落ちるため適当な場所だったとのこと。19世紀後半、ナイルの源流を発見するために冒険をしていたイギリス人・ベイカー氏がこの場所を訪れ、奴隷を解放したため、この地は「Baker's Fort」とも呼ばれています。取材時に写真をたくさん撮りましたが、心靈写真はなくて安心(?)しました。

突然の断水は日常茶飯事のグルですが、先日は丸2日も断水が続いたため不思議に思い水道公社に連絡をとったところ、なんと、オフィス裏の敷地の木を伐採中に、業者が水道パイプを切断していたことが判明！水道公社はまったく気づいておらず、重要なライフラインを放置していたことに猛然と抗議したところ、担当者は「まあ明日には直しますから、1日辛抱して」となんと悠長な対応。水道公社グル所長に上田企画調査員が「客をなんだと思っているんだ！！今日中に修理しなさい！！」と直接激怒したところ「わかった。修理はどうしても明日になってしまうので、今日は100リットル分の水を持って行く。それで我慢してほしい。」との言い訳。まったく信用していなかったところ、2時間後、本当に届きました、100リットルの水が。水道公社にしてみれば、たかが断水でこれほど怒られたのは初めてだったのでしょうか。JICAのマダムは怖いと噂されていそうな気がします。